



使節団首脳／使節団一行の最初の訪問国アメリカで撮影した写真。左から木戸孝允、山口尚芳、岩倉具視、伊藤博文、大久保利通。(大久保利謙氏蔵)

# 開港のひろば

NEWS YOKOHAMA ARCHIVES  
OF HISTORY

●編集・発行／横浜市総務局横浜開港資料館  
横浜市中区日本大通3 〒231  
電話 (045)201-2100

●発行日／昭和61年11月1日  
●印刷／(有)三信印刷所

ズームアップ

## 『岩倉使節団の米欧回覧』展

横浜開港資料館では、十一月一日から、昭和六一年度第一回特別展示として「岩倉使節団の米欧回覧」展を開催しています。日本の近代化に大きな役割をはたした岩倉使節団の欧米視察の動向を再現するとともに、その歴史的意義を再考する展示です。

明治四年(一八七二)十一月、右大臣岩倉具視を全権大使とする使節団が横浜を出発し、一路アメリカへ向かった。当初の予定の十カ月は様々な事情で大幅に延び、一年十カ月に及ぶ大旅行となつた。この使節団には参議木戸孝允、大蔵卿大久保利通、工部大輔伊藤博文ら、時の政府首脳がこそぞつて参加しており、また、後に各界で活躍する人々、例えば塩田三郎(北辰特命全権公使)、福地源一郎(ジャーナリスト)、渡辺洪基(帝国大学総長)、林董(各國公使)、外務大臣らの若き姿もあった。

使節団派遣の最も目的は次の三つであった。第一には、幕末に結ばれた条約締結国を歴訪し、明治天皇からの国書を提出すること、第二には、この不平等な通商条約の改正交渉開始を目指して、まずその予備交渉を行なうこと、第三には、近代国家日本の建設に必要な歐米文明国の制度文物を収集することであった。

今回の展示では、特に第三の目

的つまり欧米諸国に何を見、考え、学んできたかという点に焦点をあててみた。それを探るための手がかりとしたのが、随員の一人久米邦武(天保十年—昭和六年)が編集した「特命全権大使米欧回覧実記」(明治十一年刊)——以後「回覧実記」とする——である。これまでの研究で、この「回覧実記」は久米個人の著作というより、使節団の報告書のひとつとして見なされているものである。大著である。その「例言」には次のよう

に記されている。

此書ハ、遣欧米特命全権大使、東京ヲ発シ、太平洋ヲ航シ、米國ニ留り、庄瀬洋路ヲ航シ、英蘇兩部ヲ回り、歐陸二渡り、仏白蘭普露、瑞典ノ奥ヲ経テ、載ヲ回シテ、日耳曼地方ヨリ、以アモテ、瑞士ヲ回り、仏ノ南部ヲスギ、地中海ヨリ、紅海亞刺伯印度、支那ノ諸海ヲ航シテ、東京ニ復命スルマデ、日日目擊且聞セル所ヲ筆記ス、明治四年辛未

一月十日ニ起り、六年九月一三日ニ止ル、スペチ全一年九ヵ月二十一ヶ日ノ星霜ニテ、米歐兩洲著名ノ都邑ハ、大半回歴ヲ経タリ

ほんどの歐米諸国、その主要地を視察した際の記録を著わしたものだ。記録といつても決して無味乾燥なものではなく、実際に見、そして感じたその国、その土地の人々のくらしぶりについての記載も少なくない。また本文の他に、地図が十点、銅版画が三モ帳、そして幾種類もの草稿が展示されている。これらは昨秋、東京の久米美術館で開かれた「久米邦武と『米欧回覧実記』」展です。紹介されているが、今は現在この久米美術館で久米邦武関係文書の整理にあたられている小森恭子氏のご協力を得て、その後明らかになつた九段階にも及ぶ「回覧実記」の成稿過程を紹介することができた。

展示では、このほか、大久保利謙先生ご所蔵の、大久保利通がドイツでビスマルクに会つてその演説を聞き、大いに感銘を受けたと西郷隆盛にあてて書いた書簡等も展示している。なお、十一月二三日(日)には、田中彰先生による記念講演会を予定している。(中武)

# 『岩倉使節団の米欧回覧』展に寄せて

田中 彰先生(北海道大学教授)に聞く

『特命全権大使米欧回覧実記』の校注にあたられ、今回の特別展示の開催にあたっても、いろいろご指導をいたいてきた田中先生をお迎えして、展示のみどころや表現しきれなかつた点を中心にお話を伺いました。



田中 彰氏

★ 一月一日から特別展示が開催されますが、最近、岩倉使節団、あるいはその記録といえる『米欧回覧実記』に対する興味・関心が社会的に随分と強まってきていると思うんですが、その原因はいつたいどの辺にあるとお考えですか。

田中 ひとつには、現代の日本が国際的な、複雑な問題を抱え込んでいるという事情が反映しているのではないかでしようか。そこで、一世紀前の日本はいったい、どういう対応の仕方で国際社会に接し、近代国家を作りあげていったのかという関心がでてきてるのではないかと思います。

日本の開国は、米欧からのインパクトがかかつて、否応なしにこの告書はどういうふうに書けばいい

★ 『回覧実記』を仔細に見ていくと、政治・経済・制度・文化の諸側面にわたって精力的に調査・見聞してきていることがわかります。この貪欲さの秘密は何なのではないでしょうか。

田中 岩倉使節団派遣にあたっては、お雇い外国人フルベックの大隈重信宛の意見書(ブリーフ・スケッチ)の存在を見逃すわけにはいきません。また、使節団がどう

こうした歴史的な状況が現代の日本において関心を呼んでいるのではないかでしようか。

田中 ひとつには、現代の日本が

れに対応していかなければならなくなつた。その対応のなかで、今度は、日本が主体的に国際社会の中にどう乗り出していくか、あるいはどう対応していくかということが、明治四年の岩倉使節団派遣につながっているのだと考えます。

田中 『回覧実記』を纏めた久米邦武や畠山義成などが一年十ヶ月、毎日のごとくメモを取り続けてきた例から窺えるように、単なる貪欲さというのではなく、新しい国家を作るという使命感によつたものにつながっているのだと思われます。

田中 『回覧実記』を子細に見ていくと、政治・経済・制度・文化の

正予備交渉・諸制度等の視察などであったわけですが、こうした目的的の実現にあたっては当初、十月半の予定であつたわけですがけれども、はたしてそんな短時間で、日本の近代国家の形成に必要な先進文明の制度、文化なりを摸取できるというふうに考えていたので

田中 最初、使節団は大隈使節団の可能性があつたのです。それが、岩倉使節団に切り替わつた。恐らく、大隈はいきたかったと思いま

すよ。

田中 大隈使節団となれば、木戸孝允が参加する可能性があつて、そうなると維新政府の外交の主導権は木戸あたりにいく懸念があつた。

田中 そこで大久保は岩倉と組んで、木戸まで包み込んだ使節団にしてたわけです。

田中 出発した明治四年十一月の頃は、廢藩置県から四ヶ月後で、全国各地での一揆などが起つていて、まだ統一国家としての体を

なしていない時期でしたから、よもそそういう計画を立てたというべきではないでしようか。しかも、長期にわたって、実力者も含めた使節団が出ていたことに驚きます。

田中 これは、恐らく十ヶ月半ぐら



フルベッキ肖像

のかという提言をしている。この献策に沿つて回覧してきたのです。

なしていない時期でしたから、よもそそういう計画を立てたというべきではないでしようか。しかも、長期にわたって、実力者も含めた使節団が出ていたことに驚きます。

南北から少なくとも、或る一定の利害関係の上に成立した、極めて政治的な意味があると思います。

★ 十ヶ月半というのが、なんと一年十ヶ月になつてしまふのです

が、はたして約束は順守されたのでしょうか。

田中 大体初めの十ヶ月半あたりまではあまり政府も動いていないけれども、それ以降動きだした。だから、大久保も木戸も帰国命令をうけて帰るわけです。

★ 使節団の大使に誰がなるか、つまり国内の政治家のうち誰が逸早く国際状況を把握してくるか、という問題がその後の国内政治とどう関係てくるのでしよう。

田中 維新政府の実力者たちには、やはり維新後の統一国家をつくる明治政府の主導権を掌握するためには、国際的な諸状況をしつかりと理解していないとできないという至上課題があつたのではないで

しょうか。十ヶ月半というのは、どういう根拠によつたのでしょうか。

田中 ところどころで、この約定は井上馨といし大隈が提案したといわれています。そうすると、大隈らはなぜ提案をしたのかということです。

十九世紀七十年代の国際社会のはなかで、いつたい、どう対応していつたらいいか、条約改正の問題とも絡んできますが、国際的な関係に対する見通しを持たない限り、明治政府の主導権は掌握できない

ことがあります。そして、報告書はどういうふうに書けばいい

のか、四十九項目について列挙した建言もあります。そして、報告書はどういうふうに書けばいい

だから大久保も、木戸も国際社会の状況を自分の目で確かめようという意図があつたのでしょうか。それだけに、やはり貪欲さも、使命感もあつたのではないかでしょう。

★ 言い方をかえれば、日本が国際社会に乗り出そうということでお米の文明国のいわゆる「開化」を、誰が握るかというようなことが、大きなポイントになつたといふことです。

田中 国際社会に乗り出すというのは、まさに文明開化することで、それを誰が握るかが政治の主導権を握る鍵であり、焦眉の課題であったということでしょう。そして国際社会は、イギリス・フランスの先進国について、遅れて近代化するドイツ・イタリアも、ほぼ一八七〇年前後に統一が成った。その第二陣の中に、近代国家に向けて出発した日本もあつたわけで、使節団はまさにその過程でのことです。

★ 國際状況の把握という関係ですが、当時海外留学生がたくさんいっているわけですねども、『大隈文書』の中にも留学生派遣の関係文書があり、どういうふうな国は優れているかと、一覧があります。それはすなわち当時の日本が見た西洋評価一覧ともいふべきものだとおもいますが、留学生派遣と外国の情報収集との関連はいかがでしょうか。

田中 留学生を派遣する以前の情

報は必ずしも的確ではなかつたようです。行ってみて、国を変更している留学生もいます。また、留学生の中には勤勉な人とさっぱり勉強しない学生もいて、結局留学の再編成といいますか、再整理ということをやつています。

★ 言い方をかえれば、日本が国際社会に乗り出そうということでお米の文明国のいわゆる「開化」を、誰が握るかというようなことが、大きなポイントになつたといふことです。



女子留学生

少なくとも、岩倉使節団が出发する前の状況では、必ずしも、国際的な情報はそれほど正確にはつかんでなかつたのではないでしようか。ただ、「回覧美記」にみられる調査とか、現地情報の収集では留学生の力が大変大きかつたことは否めません。

★ 米欧回覧に関する研究ではさきほどの『実記』とともに、公文書館所蔵の『理事功程』なんかが主要な史料だと思いますが、こうした史料研究はどの程度進んでいるのでしょうか。

田中 ご指摘のことく、文部省の『理事功程』がよく知られています。わけですが、実際は大蔵省や司法省等のものもありますね。内容的には精粗様々で、なかには学生のレポート程度のものもある。また、『実記』の叙述にそのままつかわ

れたものもあります。報告書を書くといつても、語学に堪能な旧幕臣の書記官以外は語学に暗かつたわけだから、実際現地でのコミュニケーションはさほどまくはないかなかつたでしょう。だから、報告書を纏めることはかなり難しかったのではないかとも思います。いずれにしても、こうした史料の研究はこれから本格的にやらなければなりません。

★ 「実記」を、わたしどもが読んでみますと、小国について随分関心を寄せていたことが理解できます。特別展示において、この点をどのように表現していこうかと苦労しましたが、ウイーン万博覧会の項で扱うことになりました。どういう観点からその項と結びつけたかといいますと、「実記」のなかで出てくる「太平の戦争」という表現に魅力を覚えたのと同時に、万国博覧会を通じ、大国・小国間の物産をかいしての凄まじい競争をよく看取している、と思ったからです。展示として、どこまで表現できているかわかりませんが。

田中 アメリカからイギリス、フランス、ベルギー、オランダ、ドイツ、ロシア、デンマーク、スウェーデン、ドイツ、イタリア、オーストリア、スイス、そしてフランスを経由して帰国するわけですが、それとも、そのうち小国として、

ウイーン万博内の日本館  
庭園

そういう小国は、なぜそれだけの立派な品物を生産することが出来るのかという疑問への答えとして、国民が自主的で、自由を持つて、国民の一致した協力が必要だと考えたようです。

また、先程出た「太平の戦争」といっているのは、非常に象徴的な言葉だと思いますね。生産物を通して各国が競争するという、資本主義の原理といふものに目を注ぎ、その世界との交流をしていくためには、国民の自主・自由の精神が必要なのだと、いわゆる「太平の戦争」です。このことはアメリカをみて、その世界との交流をしていくために、国民の自主・自由の精神が必要なのだと、いわゆる「太平の戦争」です。このことはアメリカをみて、その世界との交流をしていくためには、国民の自主・自由の精神が必要なのだと、いわゆる「太平の戦争」です。

★ 小国に対する関心度の高さについてはよくわかりました、が、帰国してからの日本の選択は必ずしも小国主義を探らなかつたわけですね。まず小国之道についての議論があつたのかどうかからお話を伺えたらと思います。

田中 明治維新を遂行したりーダーたちが、ヨーロッパの小国にそれだけ着目していたということの意味は、わたしは非常に大きいだろと思っています。だから、後に、中江兆民が小国主義といふことを言って、小国は小国としての原理の上に立つて、自由民権を充実していくことが大事なん

いことをきちんと擱んでいるところです。

いうことをきちんと擱んでいるところです。

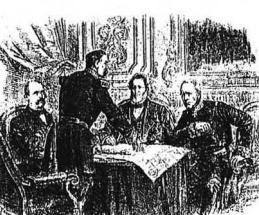
スイスの例でみてみると、三つの条件を基礎として国をつくつていると述べ、第一は、自主の権利を達すること、第二は、他国の権利を妨げないこと、第三は、他国の妨げを防ぐこと、である（第五卷五五頁）。小国であっても、このスイスのようヨーロッパ社会のなかで、りつぱに独立を堅持していることをみるべきだと指摘し、自國の中にそうちした条件を備えているからこそ立派な製品ができるのだとみています。だから、「実記」では、「国民自主ノ生理ニ於テハ、大モ恐ルニ足ラズ、小モ侮ルベカラズ」（第五卷二二頁）との結論を引き出すことができたのです。

だと強調します。だから、当時の選択としては、現実にそういう小国への道も可能性としてはあったと見ていいのではないでしようか。

実際に、日本はアロイセンの道を歩んでいきますけれども、これは、明治十年代、特に明治十四年の政変以降からです。それではその前の段階ではどうか。岩倉使節団は最初からアロイセンを目指して行つたのではない。岩倉使節団の段階では、日本の近代国家のありかたがどうあるべきか、といふ観点から見ているわけです。たとえばイギリス・フランスのような大国とは落差が大きすぎるから、そんなのはモデルにならないとみていた。ただ、当時の国際社会の中で、ビスマルク（鉄血宰相として知られた）・モルトケ（ドイツ帝国の将軍）については以前から評判になつていて、大久保利通の書簡なんかにみられるように、この二人にあつて感銘を受けているのと同時に、ヨーロッパのなかでの新興国ドイツ帝国のなかに、日本の当時の国情と似たような状況をみて、親近感を抱いたわけでしょう。特に、ビスマルクの万国公法すなわち国際法が大国の前には無力であることを指摘した演説には非常な感銘を受けたようです。

伊藤はやがてドイツを目指して明治十年代に行きますが、しかし、伊藤が使節団の一員として行ったときには、特別にドイツに関

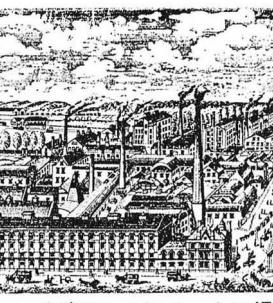
心を示したというふうにはみえません。結論的にいえば、明治の当



左ビスマルク、右モルトケ  
〔ベル・モンド・イリュース  
ト〕 1871年2月11日号

して行つたのではない。岩倉使節団は最初からアロイセンを目指して行つたのではない。岩倉使節団の段階では、日本の近代国家のありかたがどうあるべきか、といふ観点から見ているわけです。たとえばイギリス・フランスのような大国とは落差が大きすぎるから、そんなのはモデルにならないとみていた。ただ、当時の国際社会の中で、ビスマルク（鉄血宰相として知られた）・モルトケ（ドイツ帝国の将軍）については以前から評判になつていて、大久保利通の書簡なんかにみられるように、この二人にあつて感銘を受けているのと同時に、ヨーロッパのなかでの新興国ドイツ帝国のなかに、日本の当時の国情と似たような状況をみて、親近感を抱いたわけでしょう。特に、ビスマルクの万国公法すなわち国際法が大国の前には無力であることを指摘した演説には非常な感銘を受けたようです。

伊藤はやがてドイツを目指して明治十年代に行きますが、しかし、伊藤が使節団の一員として行ったときには、特別にドイツに関



イギリス・ビスケット工場

を受けて、世界の貿易で重要な品目は穀類、酒類、砂糖、たばこ、茶、コーヒー、綿花、羊毛、麻類、生糸をまずあげ、それに次ぐ主要品目として、生畜、屠肉、乳酪、卵、干肉、塩魚、皮革、紙、石炭、機械類というようなものあげてある（第五卷三二九頁から二三四頁）。

ところが、日本の場合は輸出を前提にしている生産物はすくない。これからは輸出を前提にした生産に取り組むべきだと主張している。イギリスに當てた二十巻はある意味でイギリス産業革命史であり、イギリス商業史もあるし、そうまずそれを前提におきながら、その上にヨーロッパの小国が複雑な国際関係の中で、確固とした個性を有しながら独立を堅持しているのを見て、大国・小国の選択の問題は一応おいても、おおいに参考となつた。つまり、国際社会のなかでの日本の生き方が随分と参考になつたと思う。そしてこれから日本は複雑かつ難かしい国際社会のなかで、どのような個性を造り、独立国としての国家的な体裁を整えていくか、という問題が次の課題としてあつたと考えるのである。ところが、当面直ぐにも問題になるのは貿易のことだつたと思ふのですが。

田中『実記』には、イギリスのところで、イギリスに学ぶべきもの貿易だと言っています。それは、岩倉使節団はどのよう

に思われます。初にはドイツをモデルにしようとした考へはなかつたよ

うに思われます。★ 先程のお話のなかに、使節団は回覧の過程で、資本主義の原理を見たということがありましたが、まずそれを前提におきながら、その上にヨーロッパの小国が複雑な国際関係の中で、確固とした個性を有しながら独立を堅持しているのを見て、大国・小国の選択の問題は一応おいても、おおいに参考となつた。つまり、国際社会のなかでの日本の生き方が随分と参考になつたと思う。そしてこれから日本は複雑かつ難かしい国際社会のなかで、どのような個性を造り、独立国としての国家的な体裁を整えていくか、という問題が次の課題としてあつたと考えるのである。だからここに、文明は善で、文明以外は駄目だという発想が『実記』のなかにみることができます。それじゃ、文明というのは何か

かと云ふと、自然に対し一定の力を投下したものが文明であるといふ。ところが、東南アジアはまさに自然のままに生きている。だからここに、文明は善で、文明

野蛮だと。したがつて、文明世界がその野蛮を支配するのは当然だという前提なんです。こうした歐米の文明世界と東南アジアの野蛮との対比の仕方は、ずっと日本の近代に尾を引いています。

★ わたしの勝手な感想などおもんります。

田中 この問題もいままでの小国の場合と同様で、大体、使節団が東南アジアをみてきたという事実は、帰途マルセイユから乗船し、ヨーロッパ人が船のなかで、少なくとも本国ではみられないようなく慢な態度をとつてゐる、と書き、なぜそなへかと反問する。彼らは、ヨーロッパ文明世界から捨てられた一種の棄民だとみています。つまり、ヨーロッパの文明の中のひとたちはまさに文明開化していられるけれども、それから捨てられた人々がアジアへ来て植民地で生きているのだとみてい

るけれども、それで、それから捨てられた人々がアジアへ来て植民地で生きているのだとみています。

だからここに、文明は善で、文明

野蛮だと。したがつて、文明世界がその野蛮を支配するのは当然だという前提なんです。こうした歐米の文明世界と東南アジアの野蛮との対比の仕方は、ずっと日本の近代に尾を引いています。

★ わたしの勝手な感想などおもんります。

田中 この点は、『実記』の「政俗論」（第五卷一四六頁）のところでも、黄色人種と白人種とにわけて論じているところがあるんですが、後者は欲深き人種で、前者は欲少なき人種だと述べている。アジア人は当然欲少なき人種ということになる。だから、ヨーロッパ人は欲深いから権利の主張というような形となつててくるわけで、これが自主・自由になるわけです。

先程東南アジアとわざわざ言つたのは、同じアジアのなかでも東

アジア、つまり日本と中国というのではなく、アフリカでも文明に対応する能力をもつていると考へてい

る。このように、歴然と区別してい

ると思われます。そして、日本

の能力というのは何かといふと、先進国の中を取捨選択して模倣

していく能力なんです。ヨーロッパとはせいぜい四十年くらいの差なのだから、何とか追い着くことが出来るといった、自信と期待に満ちた口吻となつてあらわれています。

★ 欲の深い、浅いの問題に関してもですが、日本が欲深くならなくてはいけないとまでは言つていなかないのではないかという気がするんけれども……。

田中 さつき、わたしは人種論で分けていると言つたけれども、それだけではない。もし人種論のみで分けたら、もうこれは平行線でどうにもならないわけです。

ただ、ここでなぜアジアと欧米とのあいだの差が生じてきたのかという疑問に対して、交通の途絶が原因だと述べ、東西交流が歴史的に存在していればこんな差は出でないのではないかと述べている箇所があります。こうした認識のうえにたって、遅れは四年あるけれども、追いつけないわけではないのだ……と。さらに、さきほどの問題に関係して加えると、日本人の能力は模倣だと言つたが、多少踏み込んで言うと、模倣から創造へという能力をどう活かしていくかということが、言外にはあると思うんです。

いずれにしても、『実記』は自信喪失の書ではない。むしろ、自信を確認した「報告書」ではないでしょうか。

★ 「米欧回観美記」を含めて、岩倉使節団派遣の歴史的意義について、今後どのような研究がぞまれるか、抱負を述べていただけたらとおもいます。

田中 歴史的な意義というのは、これから次第に明らかになるだろうと思いますね。

岩倉使節団の派遣は、明治国家ないしは少なくとも大久保政権の大前提にあつたことは事実ですか、この点を今後とも重視していかなければならぬと思う。といふことは、明治国家ないし近代國家研究の前提としての岩倉使節団の意義はまだ解明されていないと政策との関係を検証していかなくてはならないでしょう。考証は非常に難しいわけですから、たゞものために貴重なお時間を割いていただき本当にありがとうございます。

★ 今日は、お忙しいなかをわたくしどものために貴重なお時間を割いていただき本当にありがとうございます。展示を御覧になつた方がこの記事を見て、なお一層の理解を深めていただけたら幸甚に思うしだいです。

これは、展示担当者である中武香奈美・伊藤久子・佐藤孝・阿部征寛の討論を経て、佐藤・阿部が昭和六一年九月二七日、久米美術館会議室においてインタビューショーにて解説し直していく必要があると思います。

それともうひとつ、十九世紀七十年代における国際社会をどういうふうに理解し、どういうふうにその対応していくか、という点ですね。いま風にいえば、国際社会の最初に意識しているという点は、重視していく必要があるとおもいますね。ただ、こ

こで注意しておかなければならぬのは、木戸がサンフランシスコで大歓迎をうけたことに関してですが、木戸が言うには、われわれは遅れて出発してきた国であるのに、先進国アメリカは大歓迎をしてくれている。もし、われわれがやがて文明化したとき、遅れてきた国に對して、こうした歓迎を、はたしてできるだろうか、と手紙に書いている。これは非常に意味が重いと思います。

★ 今日は、お忙しいなかをわたくしどものために貴重なお時間を割いていただき本当にありがとうございます。展示を御覧になつた方がこの記事を見て、なお一層の理解を深めていただけたら幸甚に思いました。展示を御覧になつた方に思うしだいです。

これは、展示担当者である中武香奈美・伊藤久子・佐藤孝・阿部征寛の討論を経て、佐藤・阿部が昭和六一年九月二七日、久米美術館会議室においてインタビューショーにて解説し直していく必要があると思います。

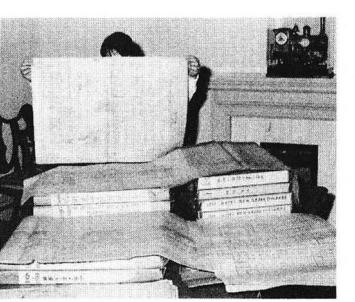
モーガンは、大正九年東京丸ビル建設のため、工事を請負ったアメリカ・フラームの技師長として来日、丸ビル竣工後独立し東京で、次いで横浜に移つて建築設計事務所を開設、根岸競馬場をはじめとして、外国系銀行、ミッショニスクリール、外人住宅等多くの建築物を手がけた。昭和二年逝去、山手の外人墓地に眠っている。横浜に現存する建築物には、根岸競馬場、関東学院(南区三春台)、大沢工業ビル(山下町)、セント・ジョセフ・ベーリック・ホール(山手町)、新井邸(山手町)がある。

J.H.モーガンの図面  
このたび、千葉市幕張町在住の大須賀常明氏及び東京都千代田区在住大須賀常良氏御兄弟から、横浜で活躍したアメリカ人建築家モーガン(JAY H. MORGAN 1877~1937)の建築設計原図類一三件一八三一枚が横浜市に寄贈され、当資料館で保存公開されることになった。

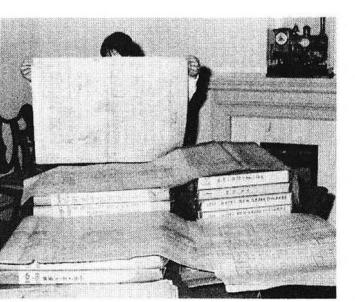
モーガンは、大正九年東京丸ビル建設のため、工事を請負ったアメリカ・フラームの技師長として来日、丸ビル竣工後独立し東京で、次いで横浜に移つて建築設計事務所を開設、根岸競馬場をはじめとして、外国系銀行、ミッショニスクリール、外人住宅等多くの建築物を手がけた。昭和二年逝去、山手の外人墓地に眠っている。横浜に現存する建築物には、根岸競馬場、関東学院(南区三春台)、大沢工業ビル(山下町)、セント・ジョセフ・ベーリック・ホール(山手町)、新井邸(山手町)がある。

モーガンは、大正九年東京丸ビル建設のため、工事を請負ったアメリカ・フラームの技師長として来日、丸ビル竣工後独立し東京で、次いで横浜に移つて建築設計事務所を開設、根岸競馬場をはじめとして、外国系銀行、ミッショニスクリール、外人住宅等多くの建築物を手がけた。昭和二年逝去、山手の外人墓地に眠っている。横浜に現存する建築物には、根岸競馬場、関東学院(南区三春台)、大沢工業ビル(山下町)、セント・ジョセフ・ベーリック・ホール(山手町)、新井邸(山手町)がある。

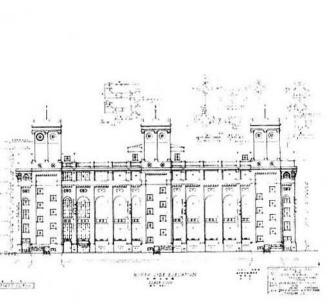
チャータード銀行一三四枚、香港上海銀行一二七枚、同支配人住宅八七枚など、既に喪われた建築物のものも含まれている。一般図はもちろんのこと、現寸図、構造図、設備図がほぼ一式で揃つており、なかには計画段階からの図面もある。



旧根岸競馬場北側立面図



寄贈を受けたモーガン建築設計図面



旧根岸競馬場北側立面図

## 資料よむやまぜな

### 原敬と幕末の仏國使節回想録

『原敬日記』の明治二年（一八八九）八月十八日の項に左記の記述がある。

「十八日 仏國使節の初めて来朝せし際同伴したる某の紀行を翻訳せしが日々新聞之を登載したり、當時関直彦同社を管理せしに因り同人に附與したるなり」。そこでまず「東京日日新聞」を調べてみると、「三十年前日本紀行 モジュ侯著 雁泉居士訳」という記事が、明治三年八月十八日、二十日（一五日）、三十日、九月六日の九回にわたって連載されていることがわかった。

幸いなことに、この翻訳の原本である Le Mis. De MOGES 著 Souvenirs d'une Ambassade en Chine et au Japon en 1857 et 1858, Paris, 1860 の英訳本

Recollections of Baron Gros's embassy to China and Japan in 1857-58, London, 1860 は、当館のブルーム・コレクションに収蔵されている。

当時原敬は、明治十八年（一八八五）からのパリ公使館書記官の任務を終えて、明治二年（一八八九）四月に帰朝し、同月十六日

より井上馨農商務大臣の下で参事官の任についていた。この本を入れ手した経緯は、左の「緒言」に示されている。

「予巴里に滞在中一日書林に行き二三の古書籍を探索せしに偶然此書を見出したり予の望みたる書にはあらざれども珍らしき紀事ある様見へたれば購ひ來りて一読せしに全く無益の書にもあらざりし」ともあつて、フランス語が相当

できた。明治十一年（一八七九）の報知社（郵便報知新聞）入社も、

使館書記官時代に熱心に勉強した原は、宣教師エプロンの学僕時代や、司法省法学校時代、パリ公使館書記官時代に熱心に勉強した

ことによって、どうな歴史的事実

をさすのであろうか。年表をくつ

てみると、安政五年（一八五八）

九月三日（十月九日）、安政五箇国

条約の一つである日仏修好通商条

約・貿易章程が、江戸において仏

使節グロ男爵との間に締結されて

いる。

現在大君（原文では l'empereur civil du Japon、原は國務皇帝と訳している）は半ば神の如きもの

で、国政は大老と老中が掌るつて

いる。「元来大君は日本國の無限

の君主なる教務皇帝（原文では l'empereur ecclesiaстиque

souverain absolu du Japon）の

代理をなす者にて教務皇帝はミカ

ド（帝）の事務を大君に負担せし

めたるものなれば大君は又た其の

事務を首相に委任せりとも云ふべ

し但し今日の有様にては大君は既

に第二のミカドたること争ふ可ら

れる事実なり」と。

原の翻訳は総じて明解である。

（吉良芳恵）

話にもなっている。その関が、明治二十年（一八八七）から東京日日新聞の日報社社長に就任しているのである。原の翻訳を載せたのもうなづける。時あたかも大隈外相による条約改正交渉の最中で、日米新条約が政府発表に先だってタイムズ紙に載り、国内は騒然とした状況にあつた。内地解放が改正交渉の一つの骨子となっていた関係上、仏國使節の日本滞在記を掲載することは、それなりの意味をもつと考えられていたようである。原はこの時三四才であった。

なお、モジュ侯著の原本名は、『原敬関係文書』第五巻のパリ公使館員時代書類（書籍メモ等）の中には残念ながらみあたらない。

それでは次に、三十年前の仏國使節とは、どのよな歴史的事実をさすのであろうか。年表をくつ

愛宕下真福寺へ、外国奉行六名の訪問、九月三日（十月九日）条約調印、条約会議にはフランス側よりグロ男爵、書記官モジュ侯、カシヨン、日本側より水野筑後守、永井玄蕃頭、井上信濃守、堀織部正、岩瀬肥後守、駒井左京（モジユ侯は野々山延蔵を駒井と取り違えている）出席、五日（十一日）

売場／ナモラノ、ネダンワノ、カ

ミ（中村出羽守のこと）／下田碇泊／物

上陸して寺院に住す／役人町、商

崎出帆、十八日（二十二日）上海

到着、と七週間の旅の記録が詳しく述べ／百名の附属役人／江戸會議／

条約調印／長崎市街／出島の和蘭

商館／海軍を作るべき日本政府の見込／支那商館／上海帰着

第一章は、「第二 日本の風

俗、習慣及政府」と題されている。

中身を少し紹介してみよう。

安政五年（一八五八）七月二十九日（九月六日）、上海を出航して

日本へ向かつた三隻のフランス艦隊は、コルベット艦ラ・ブ拉斯号（グロ男爵、コンタード侯、シャシロ侯、新通訳官マルメ・ル・カシヨン）、臨時借りの商船レ・モー（モジユ侯他）、通報艦アレジャソ号といふ陣容であつた。

八月七～八日（九月十三～十四

日）下田到着 下田奉行の饗応

十三日（十九日）江戸へ出帆、十

四日（二十日）品川沖投錨、外國

奉行七名の訪問、十七日（二二日）

カシヨン等宿舎探しに上陸、二十

日（二六日）グロ男爵一行上陸、

機智人物小說

13

ハマツ子建築家  
矢部又吉

神奈川県立博物館、旧横浜正金銀行本店（妻木頼黄設計 明治三七年竣工 国指定重要文化財）の弁天通りを隔てた向いに日本火災横浜ビルがある。大正一年竣工の旧川崎銀行横浜支店である。ド・イツ・ネオバロック様式による重部又吉である。明治二年横浜元町生まれ、元街小学校を卒業し、立教中学、工手学校（現工学院大学）建築科を経て、明治建築界の巨頭・妻木頼黄——正金本店の設計者——に師事、妻木頼黄と同様ドイツに留学して西洋建築の腕を

ト・オーダー——を使わないネオ、

でありながら、大正期の香りを伝えてどことなく女性的。正金本店とは「兄妹」建築と称され、弁天通と馬車道に他所には見られない

特異な歴史的街路景観をつくつて  
永く市民に親しまれている。近年  
ある。

このほど、地元馬車道商店街協同組合は、この日本火災横浜ビルの取壊し、改築が取沙汰されてきたが、

組合や横浜市、日本建築学会等の要望を受けたビルオーナー・日本火災海上保険株式会社の大英断により、馬車道側と弁天通側の外壁二面を保存しつつ新ビルが建設さ

さて、この日本火災横浜ビルを  
設計したのがハマツ子建築家・矢



矢部又吉

明治一三（一八八〇）年頃。この時点でゼールは未だ来日していない。

ドイツ人建築家ゼール(Richard

SEEL)は、首都東京における諸官衙集中計画実現のため明治二年一〇月二二日来日——ちなみに同目的でドイツ留学した妻木頼黄の帰国と同船——、妻木頼黄とともに大審院(旧最高裁判所明治二九年竣工)の工事監督にあたった。ゼールと國太郎との関係は明治二〇年代になつてからのことだ。もし、請負をなしたと伝えられる西郷侯爵邸が、現在明治村(愛知県犬山市)に移築されている西郷従道別邸(レスカス設計明治一三年上棟)ならば、上吉年代もビタリ一致し、ゼール以前に、フランス人建築家レスカスに就いたことになる。それはともかくとして、ゼールは、大審院竣工後、横浜に居を移して居留地建築家として活躍し、オリエンタルホテル(明治三二年、露清銀行(同三五年)や山手の異人館など)——このなかには国太郎が請負つたものもあつたはずだ——を手がけ、オリエンタル・パレス・ホテル(同三六年)を置き土産にして、明治三六年一月一四日帰独した。矢部又吉は帰国したゼールをたよつて——妻木頼黄の紹介もあつたであろう——明治三九年渡独、シャルロッテンブルグ工科大学(現ベルリン工科大学建築科に学ぶ傍ら、ゼール

——デ・ラランデは川崎肇や川崎財閥の重役早川鉄治の住宅を設計し、又吉は早川鉄治の娘と結婚する——からか、矢部又吉は、川崎家の信任を得、川崎財閥のお抱え建築家としての地位を築いていく。川崎家の当主、川崎八右衛門は、水戸藩の金庫番から頭角をあらわした財界人であるが、また建築道楽としても名高い。古くは銀座煉瓦街用の煉瓦製造を手がけたことでも知られる。

外語文書の序文後の方(セイヨウモンブノシキニイタフ)は、横浜のオデヲン座(明治四四年一二月二五日開場)と又樂館(明治四五年七月一二日開場)であるが、出世作となつたのが現日本火災横浜ビルの川崎銀行横浜支店。以後、川崎銀行本店(東京日本橋現日本信託銀行 昭和二年)を筆頭に全国各地の支店建築をひきうけ銀行建築家としての名を遺した。昭和一六年三月二四日歿。横浜には、日本火災ビルの他に、本町通に三菱銀行支店(昭和九年)、山手に六〇番館(同年)、山下町にストロングビル(同二年)を遺している。

# 五年間の想い出 遠山花樹

昭和五六六年六月に開館されてから五年余、想い出は多くかつ深い。

本館の仕事の第一は、横浜の歴史の資料を集めることである。そ

の資料の中核をなすブルーム・コレクションが、開館と同時に譲渡されたことは、ありがたかった。

ブルームさんは、開館式にニュー

ヨークからかけつけて、我がこと

のように喜んで下さったが、その直後亡くなられた。横浜の居留地に生れた故人が横浜に寄せられた並々ならぬ御厚意に、今も心打たれている。

資料の蒐集となると、本館が力を注いできたのは、展示である。展示の第三室で開かれる、年四回の特別展示、企画展示は、多様のテーマをとりあげているだけに、

事前の調査研究、国外・国内各地からの資料借用に苦労している館員の努力には頭が下がった。地下の閲覧室でも、研究者だけでなく市民の方の利用がめだつて増えて

いる。この夏も、高校生や中学生が勉強している姿を見たが、うれしいことである。

本館は、資料の調査・蒐集・公開の機関であるとともに、市民と横浜の歴史を語りあう、市民に親しまれる場であつてほしい。展示も、面白く見ていただけるだけではなく、何かを考えさせる。もう一回見なおしてみたい、そんな内容の豊かなものが期待される。この五年間、多くの市民・研究者からよせられた御援助に心から感謝する。

## 遠山館長の退任

と



遠山前館長

## 蟹澤館長の就任



蟹澤新館長

横浜は「21世紀プラン」に基づいております。首都圏の中核都市として、また国際都市、商工業都市、文化都市として21世紀へ向け大きく羽ばたこうとしていますが、今日の横浜の発展は開港以来、日々と先人が築き上げてきた横浜の歴史を見逃すことはできません。

この歴史に関する資料は、大正一二年の関東大震災、昭和二〇年の大空襲によってその多くが失われました。この様な悪条件の下にあって内外の膨大な資料が収集整理され、専門的な研究の資料として活用されると共に、資料を公開することにより横浜の歴史に関する市民の関心を高めて参りましたが、これは遠山前館長を始め開港資料館、開港資料普及協会の職員

の方々の努力の結集に外ならないと思います。

開港資料館は開館以来利用者が増え続けていますが、市民や横浜の歴史を研究する人の期待に応えるためなお一層資料の充実を図らなければなりませんが、開港資料館設立の趣旨に沿って横浜の歴史を探り出す作業は容易なことではありません。しかしながら21世紀へ向かって生々発展を続けていく横浜のために、またそれを荷う市民のためにも、またそれを荷うためにも一層の努力を積み重ねなければならないと思います。この職に就いて横浜に生れ育つた私は、あらためて横浜を振り返り感概無量のものがありますが、その思いだけでなく横浜の歴史、21世紀の横浜に情熱を捧げたいと思って居ります。

蟹澤館長の退任と蟹澤館長の就任について、私はあらためて横浜を振り返り感概無量のものがありますが、その思いだけでなく横浜の歴史、21世紀の横浜に情熱を捧げたいと思って居ります。

電話 (045) 201-11100

ミニ情報

▼寄贈資料 (七月～九月)

(1) 「大震災記念写真帖」 1点  
(東京都渋谷区 武田知勢子氏)

(2) デザイナー、エッチ、モーガン建築設計図面 根岸競馬場等一八三一

枚 (千葉市幕張町 大須賀常明氏・東京都千代田区 大須賀常良

氏等の横浜と日本及び小麦事件等の対外的な事件を外国人写真家の目を通して再現する。

▼特別展示記念講演会 (講堂)

11/23 13時30分～15時30分

料金 (北大教授) 『岩倉使節団の米欧回覧』 11/1～1/29

(1) 特別展示『岩倉使節団の米欧回覧』 11/1～1/29

(2) 特別展示『写真家ベアトと幕末の日本』 2/1～5/5

幕末の横浜と日本及び小麦事件等の対外的な事件を外国人写真家の目を通して再現する。

▼特別展示記念講演会 (講堂)

11/23 13時30分～15時30分

料金 (北大教授) 『横浜歴史講座 (後期)』 1/17～31 2/14～28 3/14

(1) 横浜歴史講座 (後期)

料金 300円

▼講座 (講堂)

(1) 横浜歴史講座 (後期)

料金 300円

転換をさぐる 講師・石井孝 (東北大名譽教授)

10/11～25 11

回 13時30分～15時30分 受講料 三〇〇〇円 (含テキスト代)

(3) 古文書を読む会 (市内地方文書

講師未定 『横浜人物誌』や『横浜産業史誌』を盛り込みつつ、横浜の歴史をさまざまな観点から資料にそくして具体的に解説してい

く。

3番地 横浜開港資料普及協会

問い合わせ 横浜市中区日本大通

方咸 (郷土史家)

蟹澤光三